

# 展勝地風土記

Vol.16

平成28年4月22日

展勝地開園100周年記念事業準備委員会

問い合わせ／北上市都市整備部都市計画課 021-8279

展勝地開園100周年記念事業準備委員会で、100周年に向けた取り組みとして、より多くの市民に展勝地を知つていただくため、展勝地に関するさまざまな情報をお届けしています。歴史的なこと、地理的なこと、自然環境のこと、そして、展勝地に深く関わった人々や展勝地を題材にした美術・文芸作品などについて紹介していくります。次回は平成28年7月22日に発行します。

## 展勝地の春

「力タクリの会」代表 瀬川 強

る。雑木林の明るい日だまりの中、越冬したヒオドシチョウが舞い、枯れ葉の中からカナヘビが顔を見せてくれた。

展勝地といえば桜の名勝として知られているが、道路沿いの桜の下には古来から咲き続けるアズマイチゲ、フクジユソウ、キクザキイチリンソウ、カタクリなどの、スプリンギングエフエメラルと呼ばれる早春植物が春を謳歌している。さらに、極楽寺から国見山へのコース沿いには太古から変わることの無い悠久の自然を堪能できる空間があり、3月下旬の肌寒い日にそこを歩いてみた。

極楽寺の駐車場に着くと天気も良いのに私の車だけで、付近には、外来種のオオイヌノフグリ、ヒメオドリコソウが咲いていた。歩き始めて杉の植林地を抜けると、ぱっと明るくなり足下には早くもカタクリの葉が出ていた。薔薇もあるが、まだ固く閉じておりもう少し気温が上がらないと花は咲かないだろう。夏に黄色い花を咲かせるマルバダケブキもつやかな緑の葉を広げ、ヒメニラは細い葉を伸ばし小さな蕾も付けてい



越冬蝶のヒオドシチョウ

「力水」と呼ばれる小さなコンクリートにできた水溜まりがあり、そこをヒノキアスナロが日陰となるよう覆っていた。水溜まりにはトウホクサンショウウオの卵嚢が沢山産みつけられていて、底に沈んだホオノキの葉をそつと取り除くと、数頭のサンショウウオが潜み子どもの成長を見守っていた。ここは、車止めから数十メートル歩いただけで、太古と変わらぬ空間を感じることがでできる素敵なものだ。所々に石仏観音や急登箇所には鎖場があるものの、喧嘩は尾根で遮断されており俗世界は感じられない。

やがて国見山の尾根にたどり着き展望台まで行くと、眼下に北上川と和賀川の合流点、北上市街地が広がり、その奥に奥羽脊梁山脈が壁のようになっている。こここの川の流れ平地を潤すための雪を抱いており、



トウホクサンショウウオの卵嚢

雪の上の厚い雲はまだ水が足りないだろうと雪を降らせている。この地に展勝地と命名し、人と自然が共存しながら生きていくようにとの思

いは、ここからの眺めがそのような気持ちに高ぶらせたに違いない。展望台を後にして珊瑚岳まで足を伸ば

したが、途中の所々にはシュンラン、オウレンが春の日差しを浴びかわいい花を咲かせていた。



国見山頂から和賀川、奥羽を望む



シュンラン

## 筆者プロフィル

瀬川 強 つよし 1954年花巻市生まれ。

1985年にカタクリの花に惹かれ湯田町(現在西和賀町)に移住し、1990年カタクリの会を結成。以来、西和賀で毎月一回奥羽自然観察会を開催。環境省希少動植物種保存推進員、岩手県環境アドバイザーなどを務める。著書に「イーハトーブ・フォト心象スケッチ」「雪国の草花」「シーズン・オブ・イーハトーブ」全4巻「奥羽の自然・西和賀大地」「フォトネイチャーエッセンス」など多数。

それぞれの時代により人間の心の価値観は変遷していくが、自然の改変は慎重にしていかなければならぬ。今地球が抱えている大きな課題は、地球の温暖化と生物多様性の問題である。人間の快適な暮らし地球温暖化を作り、私たちの兄弟である動植物を絶滅の危機に追いやつている。一木一草を愛でることででき、国見山の上から鳥瞰的に物事を考えることができたら、展勝地は百年後も千年後も変わることなく、春にはカタクリが咲き、越冬蝶が舞い、水辺にはサンショウウオの世代を引き継ぐ様子をうかがうことができるだろう。



オウレン